

「荒れ」⇔「やわらかさ」

—万石浦ライオン隊の修学旅行を振り返って—



朝 5:45 分、子ども達が集まり始めました。3日前、父親が「うちの子は行かせねえから」と、声を荒げて突然電話してきた姉弟は、無事に家を出てくることができようか。父親から電話があった次の日の夜、その弟が突然電話をしてきて、「俺、絶対行くから！家出してでも行くから！キャンセルしちゃった？」。父親の言葉をそばで聞いていて、私たちがキャンセルしてしまうことが心配だったようです。

大きな荷物を持って、次々に親に付き添われて集まってきます。先ほどの姉弟も姿を見せました。子ども達は集まると口々に、「〇〇はまだ？」、「迎えに行ってくださいか？」と、姿を見せていない子どもを心配しています。

出発時間 6:00。約束通り全員が集まりました。荷物と子ども達を車に急いで詰め込んで、親たちに見送られながら、万石浦中学校を後にしました。そして、そこには、修学旅行への参加を最終的に親に認めてもらえなかった女の子の姿もありました。彼女は、朝 5時から起きてみんなに手紙を書いたとのことで、それが支援隊長に手渡されていました。「〇〇、おみやげ買って来るから！」その言葉に大きくうなずき、大きく大きく手を振っています。行かれないそのことに「いじける」様子もなく、寂しさをこらえたその堂々とした様子を見ていた 3年生の男の子は「〇〇、行かれないんだ…」と、その裏の事情を子どもながらに察する様子もうかがえました。確実に子どもたちが変化をしていることを実感しながら、いよいよ「万石浦ライオン隊」の旅が始まりました。子ども 13名、おばあちゃん 2名、計 15名が隊員です。

新幹線→富士山→ペンション→遊園地ぐりんぱ→富士サファリパーク→新幹線という、二泊三日にしては欲張りな内容の旅でしたが、子ども達の元気の良さと、声の大きさがとても目立った三日間でした。このパワフルさは、奇跡さえも呼び起こします。旅の天気予報は三日間とも雨なのに、子ども達の活動には全く支障がありませんでした。富士の五合目から六合目まで、小二の子ども達も登り切ったときも、下界ではものすごい雷雨だったそうですが、雷様より上を歩く(走る?)ライオン隊には全く影響ありませんでした。遊園地でもサファリパークでも一緒でした。食事をしているときは雨なのに、バスに移動する時間になると雨は止んでいます。宿に着くと雨が降り始めるのに、ささやかな花火をしようとする、決めた時間にはぴたっと雨が止むのです。

もちろん、元気の良さがいいことばかりではありません。はじめは珍しくておとなしくしていた新幹線も、時間が経つにつれて本領発揮。声の大きさとお下品な言葉の連続に、思わずスタッフたちは、「他人のふりをしよう」と守り(?)にはいることもありました。「これだけ動いたから、夜はすぐにぐっすり寝ちゃうね」というスタッフの予想は見事に打ち砕かれ、ペンションじゅうから、遅くまで子ども達の声が、ワォンワォンと聞こえてきます。それこそまるでライオンが吠えているよう。

そんな修学旅行の中でも、子ども達は大きく変化していきます。仙台や東京駅は、夏休みということもあり人がごった返してします。迷子にならないかとヒヤヒヤするスタ

ッフの心配をよそに、子どもたちはちゃんと隊長のもとにある「らいおん隊」の旗の下に一列に並んで行動することができました。食事は子ども 13名だけのテーブルを作りましたが、みんなで仲良く食べることができました。日程の確認をする大人の話をしっかり聞いて、行動することもできました。ゲームは仲良く譲り合って遊ぶことができました。そして何よりも、夜の「振り返りの時間」では、大人と 1対1で、時間をかけて一日を振り返り、絵日記や作文にまとめていくことができたのです。それは、大人を信頼し、その安心感の元に、自分自身が成長していくことを期待し、努力する姿でした。

ペンションの食堂の隅に、一台のピアノが置いてありました。小二の男の子がさわり始めました。どうやら「ドレミの歌」の「ドはドーナツのド」しか弾けないようです。その後、スタッフに「弾ける？」と尋ね、それを教わると、初めてさわるピアノに魅せられたのか、何度も練習して、ついには最後までマスターして、大人たちに聞かせてくれるまでになりました。万石浦で支援していたときは、ちょっとしたことでいじけて、「ばーか、死ね！」と叫んでどこかへ消えてしまっていたのに、そんな姿はもう見られません。人の中にいることが楽しいかのような、明るい表情に変わっていました。どの子もやわらかく、すなおな雰囲気をその身にまとい始めていたのです。そしてその子にそのことに熱中しているその時間、同じ食堂の中では、テーブルごとに一人ひとりの振り返りが行われていました。そのピアノの音を聞いてはいるのですが、それを誰も邪魔することなく、それぞれがそれぞれに自分のことをしている、そんなやわらかい時間が 1時間以上も続いていました。



なぜこの子ども達は、はじめてであった頃、あんなにとげとげとして、人を敵のように見ていたのだろうか。私たちは、それを「荒れ」と表現し、それとどようにかかわっていくのかを模索しながらの支援だったわけですが、この間の子ども達の変化、そして、この修学旅行での子ども達の変化に出会い、「荒れ」の原因をあらためてスタッフたちは考え始めていました。

万石浦での支援の中で、スタッフ全員が気にかけている 1人の女の子がいます。いつも元気で一番乗りぐらいに教室にやってきて、教室のメインの活動に参加していく元気な力のある子どもです。黒板が大好きで、計算式や漢字などの勉強も黒板を使ってやるその様子に、学力の大きな遅れがあるようには見えません。しかし、なぜか、時折、何かのきっかけがあると、教室にいる小学生の男の子のほとんどが、彼女をターゲットにして「〇〇、臭い」「〇〇、うぜー」「〇〇、あっちへ



行け」というものの言いを始めます。それは、彼女が全く関係していない事柄でも、まるで「やつあたり」をするかのようなもの言い、さらには、彼女の頭を強く叩くという行為に及ぶこともありました。そして、さらに不思議なことに、彼女は、そうした行為に対して、ほとんどの場合、何ら反応をしないで黙って受けとめるのです。泣くこともなく、怒ることもなく、黙って無表情な様子で、起きている事柄を流して行きます。泣いたり怒ったりの何らかの反応があれば、スタッフも「彼女の気持ち」を軸に、いじめている男の子たちに対抗するという戦略も打てるのですが、そうした反応もないためにきっかけも掴めずにきました。そして、どういう関係の蓄積の中でこうした状況が生み出されてきたのかを、ずっと考え続けてきていました。

今回の修学旅行中、この女の子にやつあたりをする行為が大きく目立ったのは、こだわりの非常に強い小学5年生の男の子が、自分が気にいっているスタッフがそばにいてくれないことを不満としてダダをこね、その要求が通らないことを悟った時のことでした。近くにいた同年の男の子に「ねー、〇〇って、臭いよね」

その時、「そうか」と気がつきました。子どもたちは、自分達がうまく行かない時、あるいは要求が通らない時、そのことが表面化すると、自らが集団の中で低位に位置づけられるような感覚を持っていることに。だから、自分より下に位置づく者を引き合いに出し、自分の集団内での位置が最低でないことをアピールする。そして、その集団の最低位置には、私たちスタッフがずっと気にかけてきた女の子がいて、彼女はその位置を自ら引き受けてきたのです。だから、彼女は泣かないし怒らないのです。まるで、それが自らの役回りであるかのように。きっともっと小さい時には、彼女も泣いたり怒ったりしていたのでしょう。しかし、そうしたとしても、彼女の味方になってくれる友だちはもちろんのこと、味方になってくれる「大人」もいなかったということなのでしょう。それらの蓄積の中で、彼女の無表情は作られてきたのではないのでしょうか。私たちが「荒れ」と表現してきたことは、集団の中で下に位置付かないための行為ではないのか、私たちはようやく「荒れ」に迫ることができたような気がしました。

今回の修学旅行で寝泊まりをとともにしたことで、彼女が「臭い」と言われてしまうことの原因らしきものに触れることができました。そして、そのことをスタッフと話し、「あなたならできる」、その言葉をもらった時に、彼女の目からは大粒の涙があふれました。彼女の「自立」への道のりも、今ここからならば始められる、そんなところによりやく到達した気がしました。

この旅行の中で、子ども達は、よくスタッフと手をつないで歩いていました。それは、子ども達が自然に近くの大人の手に触れ、手を握った結果です。その手は小さく弱く、でも温かな手でした。「大人」を信頼し、その安心感の元に、自分自身が成長していくことを期待し努力する経験、私たちがかれらとともに過ごす時間は、そのような意味を持つようになっていたのかもしれませんが。いつもはやんちゃな男の子が、東京駅でスタッフと別れた後、新幹線では涙ぐんでじっとしていました。

旅を終えて、万石浦避難所に着いたときには、親の許しが出ずに参加できなかった女の子が出迎えてくれました。まだ避難所生活を余儀なくされているその子が、笑顔で出迎えてくれ、おみやげや、みんなからの手紙をそっとうれしそうに見ている姿で、この旅は終わりました。

「これからも来てくれるよね!」。旅の途中で何度も聞いた子ども達の問いかけが帰路について私たちの中でリフレインのように繰り返されていました。

【陸前高田の学校支援】 陸前高田市の小中学校は、1学期のスタートが遅れたこともあって、7月の最終週から8月第1週が終業式で、お盆明けと同時に2学期が始まるとのことでした。それにあわせて、気仙小学校からは地域で行われる学習支援のための机・椅子の調達の依頼があり、引地台中学校から借用で物資提供を行いました。

4月にスタートしたEd.ベンチャーでの東日本大震災支援も、陸前高田において当初予定していた7月いっぱいの支援を無事に終えることができました。もちろん、当初の予定は、あくまでも予定であって、緊急的な支援はなくとも、継続的な息の長い支援活動が今後も必要であるという認識はもっております。既にジャパンプラットフォームより「被災地域の学校における理科室再興プロジェクト」として、7月25日～8月24日の期間限定で3,419,850円での助成が決まっており、独立行政法人福祉医療機構より8月以降3月までの継続的な子ども交流支援として393万8000円が内定しております。したがって、関東圏が夏休みである8月は、各学校との連携、すたんどばいみーとの連携を念頭に、今後の支援活動の方向性を検討する期間にして参りたいと考えております。また、緊急性を鑑みて毎週発行して参りました支援通信も、今後は月1回の発行を原則としていきたいと考えております。

【ご協力に感謝!!!】

■陸前高田支援 □支援隊メンバー：柿本隆夫（引地台中学校）、勝田新（引地台中学校）、清水睦美（東京理科大学）、清水いく江、金子尚弘、グイキムチャイ（会社員）

すたんどばいみー：西岡歩・長畑シゲミ・伊藤瑞姫

□7月27日（水）気仙小学校 支援物資運搬：夏休み学習会用机15脚・椅子48脚

□7月29日（金）小友中学校：ノートパソコン1台（支援物資）、広田中学校：家庭科教材（支援物資）、気仙中学校：支援物資購入手続き

■石巻市万石浦（修学旅行）詳細は号外に掲載

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）7/22～7/31

菊原博子（大和小学校）、菊地原博（フリーライター）、日比和子（光丘中学校）、藤田武志（日本大学）、権田和子（元中学校教諭）、増山博丈（大和市役所）、櫻井千夏（歯科衛生士）、反町一樹（茅ヶ崎保健福祉事務所）、渡辺厚子（Ed.ベンチャー日本語教室担当者）、伊那中央病院（清水雄策）、あじさい倶楽部

※「スマレザヤマグチオオ」にて振込がありました。振込に心当たりのあります方は、事務局までご一報ください。よろしくお願ひします。

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

